

広報のとりもつ縁

〈下〉



南国市教育相談所 高石文一

広報は月二回発行、一回一万四千五百部印刷され、全戸に配付されている。読んでいる人は数万人のぼつても、教育相談所のことを目にとまるのはその一部であろう。

また、それを見ても甥や姪のために勧めてやろうと行動をおこす方はごく一部であろうし、勧められなくても出かけようとするのはそのなかでもごくわずかであろう。とすると、今回のように遠く市外からここまで来られたことは、何万、何十万分の一の貴重な存在とみなければならぬ。

こちらも学校に出かけて、時間をかけて話し合い、全校一致した態度であたつてもらうことにした。特に学級主任がよく理解してくれたことは、この子にとって幸いであつた。

十二月の末、母子の来訪があつた。母子の顔が明るいの。『勉強しました。小学校入学以来、家に帰るとすぐカバンをほり出して遊びに出かけ、ただの一回も教科書を開けたことがありませんでしたのに……』

二学期からは、学校から帰ると

何も言わないのに自分で勉強しました。二学期の通信簿に、生まれて初めて3が三つでてきました。こんなうれしいことはありません。

『よかったですね。これなら、三学期には4もでてくると思いますよ。楽しみですね。』

元日の朝、はるばる電話をかけてきた。

『今年はいっしょうけんめい勉強します。遠いのでたびたび行けません。ぼくは先生がいつもそばにいる気持です。ぼくは勉強して高校、大学にも入り、学校の先生になるつもりです。』とのこと。

特別の学級に入らなければならぬような者なら、どうしてこのような電話がかけられるものか。それどころか、この子は将来に望みを持つことができるようになってる。

子どもが望みを持つということ、その前に自分で考え、計画し、実行して仕上げての喜びを味わうことがないと出てこないものであり、また、その喜びはその前に何か自分でして他人に認めてもらつ

て得意になることがないと出てこないものである。とすると、短いこの一学期の間に、この子は何年分もの多くの体験をまとめて成長したものだといえる。これで軌道にのつてきたと言つてよいのではないか。

それからはすこぶる順調に進んだ。二年たった。今年の三月、新聞の高校入試合格発表欄の高知市内の普通高校のなかに、はつきりとその名を確認することができた。翌日、一家そろつての来訪があつた。

『ほんとに何と言つてお礼申し上げますものか、到底言葉では言い尽くせません。』如何に教育の力が偉大なものか。こちらに来るパスのなかで県会議長さんにも話してきたところ。このような者は、県内にもまだほかにいるかもしれません。私は機会あるごとに、この子の例を吹聴していきたいと思つています。』

障害者に「楽しい日曜日」

西島園芸団地が招待



春の光しがみえはじめた二月二十一日、コダチアサガオのほのかな香りやブーゲンビリアの紅い花、バナナ、パイナップルが実つて、季節を先取りした「西島園芸団地」に障害者の方々が集まつて楽しい日曜日を過ごしました。

この催しは、今年が国際障害者年にあたることから、西島園芸団地が身体の不自由な方など約二十名を招待したもので、集まつたみなさんはほとんどが自宅療養で、はじめての見学だけに本人はもち

ろん、付添いの方も大変うれしそうでした。

当日は、社会福祉協議会の協力などで十一時に団地に集合、早速メロンやスイカのなつてくるピニールハイスを見学し、三十度の温度に「暑い暑い」を連発しながら説明をうけました。団地側の「よくおいでくださいました。どうぞごゆっくり」との歓迎のあいさつとあつて、参加していたホームヘルパーさんの腹話術が披露されるなど、こやかなふんい気のおかげで、よく冷えたスイカやメロンをこちそうになり、ここだけの一足早い「春」夏を味わっていました。